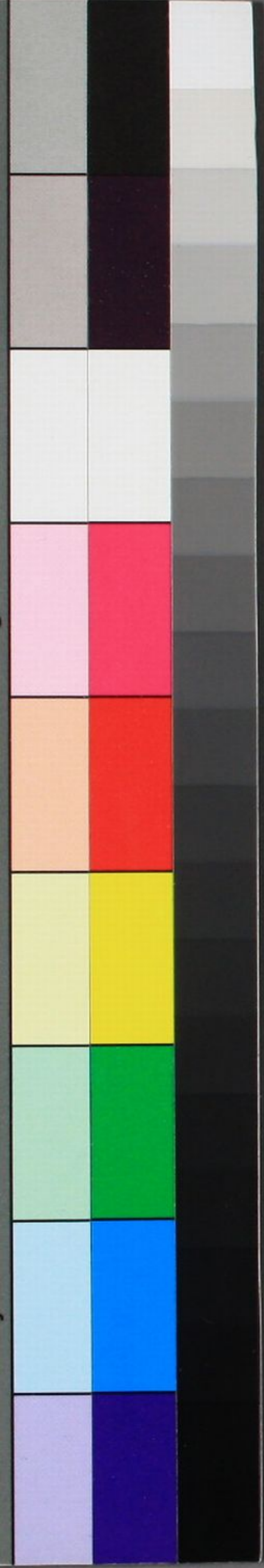
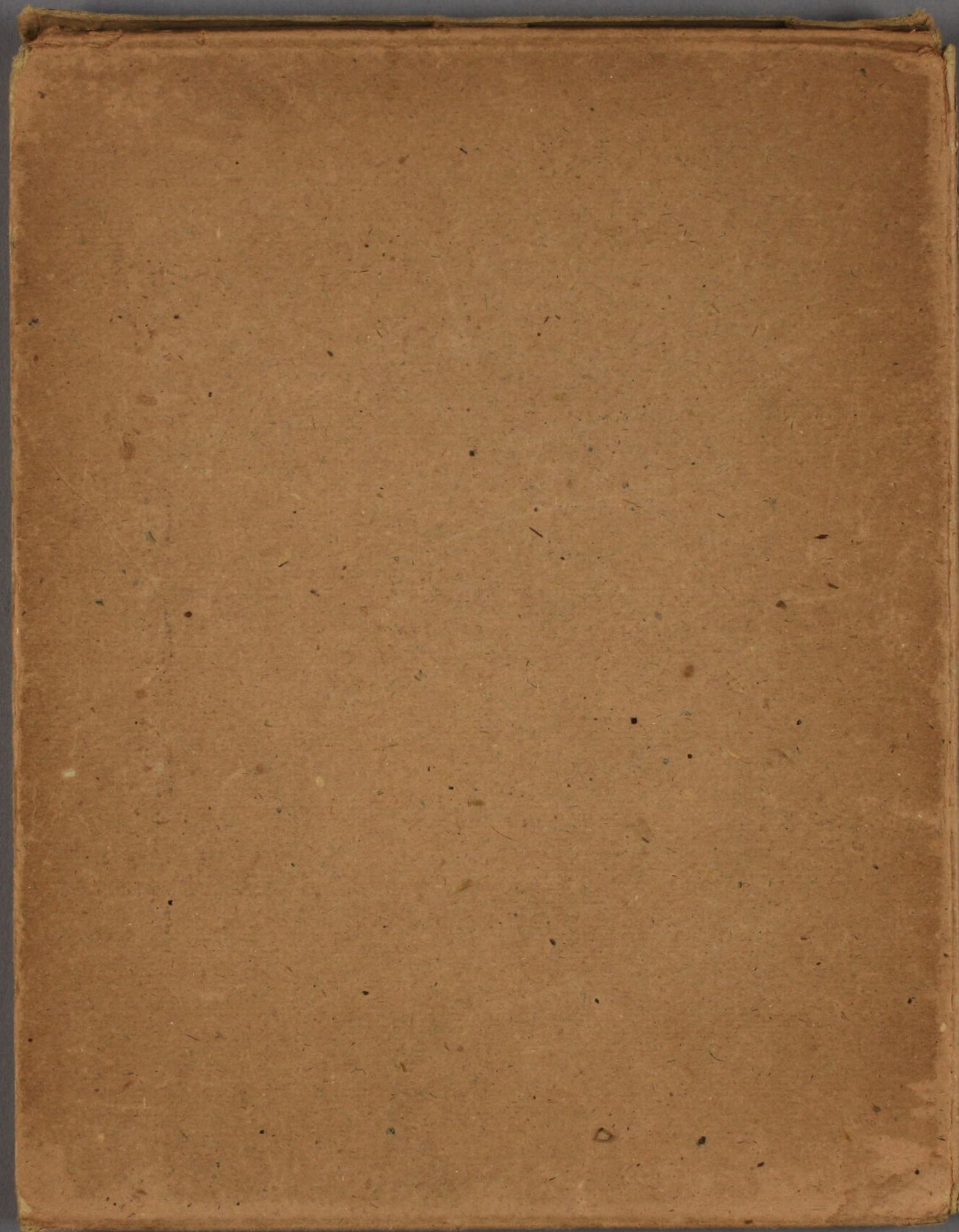


富田碎花詩集

地の子



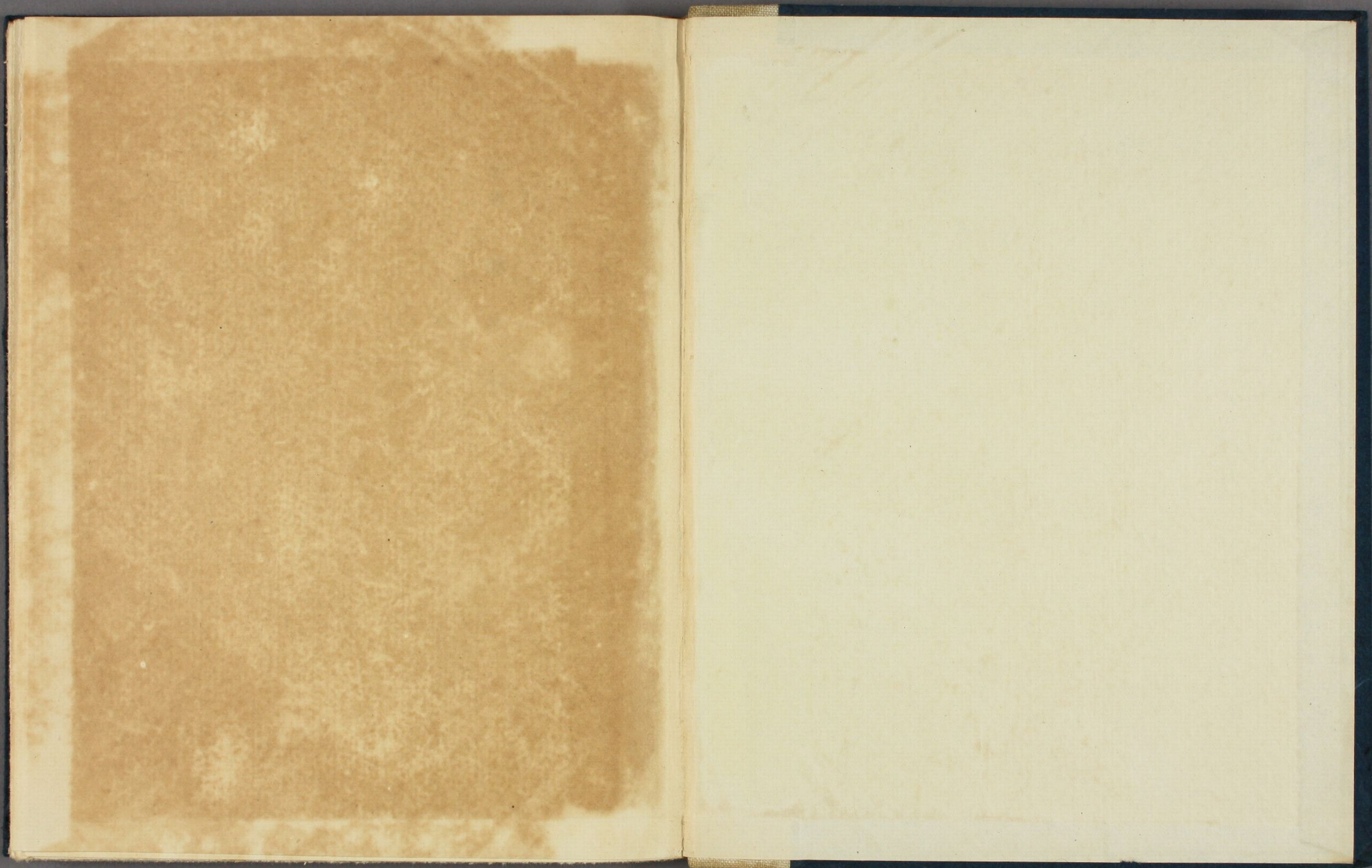
富田碎花



地の子

富田碎花詩集 地の子





詩集  
地  
の  
子



富田碎花詩集

地の子

—一九一九年版—

地の子 (Terrae Filii : 1915—18)

一九一八年篇………三篇  
一九一七年篇………一〇篇  
一九一六年篇………一五篇  
トラヒスト修院詩集(一九一六年夏—秋)………五篇  
一九一五年篇………三篇

一九一八年篇

若し我れ最も賤しきものと等しきものな  
らずば、我れは何ものにも非ず。

— エドワード・カーペンタア

幕屋のうへの雲

噫、

いま、

蜜と乳との溢れ流れる沃野をまへにして  
彼れは死にゆかうとしてゐる。

彼れの眸は歡喜と感謝の涙で一ぱいだ。

彼れは約束の成就を眼前にして

永遠の休息に就かうとしてゐる、

悲しく傷ましい先驅者の運命を、感謝をもつて受けやうとする。

神は何故に、

果して何故に彼れをして

『彼れらの地』に一步を就けることをさせなかつたのか、

私はいま此處にすべての先驅者の傷ましい避けることの難い運命を想はされる。

——いま私の瞳には

朧けながら一切の完成の影がうつる、

地上一切のものの明日のかがやかしい姿が見える、

彼れらは幸福そのものだ、

6

7

そこには貪りむさぼが無い、  
争奪むさぼが無い、

彼れのもの無くして彼れらのものだけがある、

あらゆる有機物無機物が同一の標號の下に登録される、

そこには拒否が無い、

あるのはすべて受容だけだ、

あらゆる扉は閉ぢられることは無くつねに開かれたままだ、

あらゆる饒多も多過ぎることは無い、

あらゆる乏しさも少な過ぎることは無い、

必要はつねに充たされて

そこには春宵の高樓に驕る貴人のかげが無いと同じく

寒夜の街頭に凍える乞食の姿も見ること無し、

靈魂が裸で無いと同様に

肉體もまた適當に覆ふものもち

しかもそれらがびつたりと密着した正しいかたちだ。

彼れらの意慾は雲のやうに自由で、

どうだ、あの風吹くままの抗はない姿！

しかもそこにおのづからの節制と埒の無い正しい法則とがある。

噫、

私たち、

いつまでもいつまでも一筋の街道の開作者、

それに沿うた運河の川堀人足、  
その一點の都市の大尖塔を築く煉瓦の積み手、  
建築材料の運搬人、

——一切の下積み、椽の下の力もち、

濠の埋草、

永遠に慰めをもたないもの、

しかもいま私は先驅者の満足と歡喜と、なほそのうへに感謝をもつ、  
そしてやがてこれは私たちすべてのもののそれだ！

## 五月、苦惱の日

——世界大戦第五年の春

五月！

あらゆるものはのびをした、

そして一齊に生き生きと呼吸を初めた、

木の梢には樹の葉、

草の根からまた莖からは草の葉、

みんな一生懸命の生の営みである。

空には鳥の歌、

地にはあらゆる生きものの運動、

充分な眠りから目覺めたものの澄澗さをもつて、

新しく生れたものの喜悅をもつて。

何故なれば人間だけが、

被蔽物かくれものを跳ね除けることをしないで

白日の下を狂ひ、舞ひ、さまよひ、

あるものは僻々として歎くことだけをつづけるのか。

五月！

五月の微風が君の頬を愛撫するとき、  
何故なれば君の唇は綻ばぬか、  
君の額はいたづらに曇るだけで、  
腫は力なけに、死魚のそのやうではないか。

君よ、

さう性急に責めるのをしばらく待つて呉れ、  
吾々の苦惱は負ふべくあまりに大きく重い、  
吾々が闘はねばならぬ闘ひは無限だ、  
きのふ弓弦のやうに張りを見せてゐた心は  
吾々の知らぬ間に、腐れた布片のやうになつてしまつた。  
吾々の力はどこへ逃けて行つたのか、  
吾々にはいま憑き物が落ちたやうな放心だけが残つてゐる。

ああ、五月！

蒼空の太陽、

そしてあらゆるものの活潑な呼吸、

——だがここにそれらからは全く除かれてゐる者、  
吾々！

10

據るところを失つたものは、  
祈禱の力をさへ奪はれたものは如何すればいいのだ、

11

神よ！

と、思ひ餘つての叫びも

けむりのやうに答へはなく、砂のうへにそそがれた水のやうに消えやうとする、  
溺れるものは一本の薬屑にさへすがるといふ、  
吾々は何を掴まうとするのだ？

君らよ、(殊に宗教と社會運動の名に於いての教導者たちよ)

吾々は君らによつて責められるに先つて、

教へてもらはなくてはならないのだ、

導いてもらはなくてはならないのだ、

吾々はいますべてを喪つたものだ、

吾々は人間の世界のこの『現實』をまへにして、

一切がわからなくなつて昏倒せんばかりだ。

噫、

五月！

あらゆるものうへにそそぐよるこびの光も、  
人間の世界は與り知るよしもない眞晝ながらの闇黒だ。

夕雲の歌

此處に一人の祈禱と懺へと——  
暴ぶ風に吹き散らされて  
野面にかたちを成さず  
迷ひ迷ひ消えてゆく。

赤い冬の夕陽は  
濛氣に滲んで  
その色いよいよよすさまじく  
満目の自然また熱なく燃えて。

噫、  
かたちを成さぬ祈禱と懺へと  
涙に亂れる千々の想ひと  
風強いなかの夕野。

12  
私は雲をおもふ、雲を、  
仰ぐ空、

13  
そこには風もないと見えて  
しづかなすがたの雲。

昔から幾千萬の空想兒が  
雲よ、  
君を仰いで  
いかに慰めを求めたことか。

順禮はその日の旅の終り近く  
長い長いいつが終りとも知れない街道で  
こちたい想ひに  
君を仰ぐ。

牧人は  
忠實な番犬と一緒に  
一日の勤めのかへり路——  
ふと君をながめた。

ここに都市居住者は、君を、  
散りつくした篠懸ノラダシの並木の下で  
騒然とした街のどよみのなかから  
鋭角な建物の林立の間から見出て吐息した。

ここにまた煤煙と苦熱との工場の中  
君を想ふ若い工人の  
祈禱があつたとしたら……  
噫、それは君の罪ではない。

みづからの手で  
みづからとらはれの  
煉瓦の高塀を修築する  
囚人が、ふとも仰いだ君のかたち。自由！

——ああ、  
雲、  
君を仰げば、さまざまの物語と情景が  
瞳にうつつて来る。

かたちを成さぬ祈禱と懃へと、  
夕かせのなかに  
私はいまは歎くこともせず、  
迷ひ迷ひ消えてゆく方を見守る。

### 一九一七年篇

各々は、他のものを完成し、また他のものに  
よつて完成された。

——ジョン・ラスキン



かへりつつある幸福

これは心寂しい旅びとのゆくみちか、  
—— 一路ははるかである。

かがやかに太陽のてる日もある、  
そして時として林のなかには  
樂しげに啼く鳥もある……が、  
おほかたは坦々たる單調に倦ませるか  
さもなければ行くこともまどはれる阻しい路である。

旅びとが脊に負うた重さうなものは

ほかならない鐵の十字架だ、

母の胎内から（と云はうより『無かつた時』から）

墓場まで運ばなければならぬ

重い、重い十字架だ、

……ああ、この順禮の旅は

いつが終りともはかり知られないのである。

ある口、

16

17

この心寂しい順禮は大きな町にさしかかった、

その聯らなつた櫓並のきまなの窓々からは

やさしい手が出て

銀貨や、銅貨が

汚れた順禮の手に渡されやうとした、

然しそれは激怒と一緒にやさしい手から離れはしなかつた。

順禮は飢ゑてゐた、そして寂しかつた、

彼れが望んでゐるものは

一碗に過ぎない肉體の糧である、

十字架を運ぶ務めを果すためには

能ふだけ生きてゐねばならない、

それには飢ゑたままでは歩いてゐられない。

富んだ人々は、昨日

彼れに僅かの耕すべき土地を拒否したではないか、

病ひを獲たるの故を以つて工場のその仕事から放逐したではないか、

そして彼れはあての無い

終りの知られない順禮に、旅に出た、

—— だがそれらの光景を見てゐるに耐へない人が漸次に殖えて來た。

それらの人々は欣んで十字架を共に負ふことをした、

持つてゐる僅少のものはこれを共同にした、  
 云ふまでもなく先づ飢ゑを充たすべく自分らの糧の半分を割いた。  
 そして勵まし合ひ、慰め合つて  
 寂しいみちを一緒に行くことを誓つた、  
 心寂しい旅びとの心には力がかへつた、  
 そして顔々は幸福に輝いてゐる、  
 みちはまだ長い……………。

### 子供は教導者だ

子供は  
 それが歡びであらうが、  
 かなしみであらうが、  
 人に云はなくてはゐられない、  
 人が聞いて呉れやうが呉れまいが、  
 そんなことは一切おかまひなし。

一切の大人、  
 あなたたちのしつかり握つてゐるものを手から離して御覽なさい、  
 あなたの貯蔵庫の鍵を  
 みんなの眼に見える樹の枝に懸けて置いて、  
 勝手にそれを使用させて御覽なさい、  
 あなたの所有が脅されると誰れが云へるでせう、  
 すべてはあなたのもので無くて  
 同時にすべてはあなたのものです！

嵐のなかに躍るもの

眼もはるかな遠くの地平線に湧いた一ちぎれの綿のやうな  
密雲は、見てゐる間に  
擴がり擴がつて生きものの世界のかぎりを掩うてしまつた、  
電光の使徒は雷鳴を伴つて  
幕地に疾驅して來る、  
生きたものはみんな一齊に呼吸をひきしめて最もかすかな聲音をさへ洩らすことを敢へてしない、  
すべてはいまや來やうとしてゐる嵐の洗禮を待つてゐる心だ。

嵐だ、

嵐だ、

然し見て呉れ、この生きてゐるもの勇ましく抗爭する様子を、

あらゆるものを根こそぎさらつて行かうとする暴力が

見るからにいたいけな原頭の草の

微かな一葉片のまへにすら

叩頭しなければならぬとは如何いふわけだ、

生きてゐるものはみんな強い、

地から生へ抜いてゐるものはみんな強い。

あらゆる暴力といふ暴力、

あらゆる殘虐といふ殘虐、

みんなこぞつて生きてゐるものうへにその強權を振つて見るがいい、

そして最も微力なものが最も強大なものとして顯現はれる

その驚異を親しく驚くがいい、

謙虛が有つてゐる金剛不退轉の心を、

貧乏が有つてゐる絶大な富を、

無言が有つてゐる雄辨の威力を、

——あらゆるパラドックスを。

嵐が急過する。

いまこそ！ 生きたものは一齊に立ち上つて、

歡びに躍る。

朝の歌

隱忍の永い日々――

風や

雨や

明暗や

それらあらゆるものを過ぎて、

けさ、

いま!

しづかな空氣のなかに

夢からさめたばかりの黄金の一塊、

丈高い莖のうへの向日葵。

歡喜に

一ぱいの呼吸をする無邪氣な少兒、

光と熱のその少兒は翼にのつて

翔けらうばかりである。

生れたばかりの花は、

嵐をおもふことを知らない、

22

23

ただ一心に咲いてゐる、

やがて磨かれ磨かれてゆく朝空に

次第に沖る太陽、

それらのもとに飽くまで擴がつてゐる

海!

風や、雨や、夜や

――どうして嵐のあつたことなんか思はせることをしやう?

若い花は咲けばいい

一心に、

それだけで充分だ。

暗い白日

痛んだ肉靈の所持者たち、  
私のすべての友よ、

——春光のもとに  
鬱々として私はひとり病んで  
またしてもとりとめない苦い想ひにとらはれてゐる。

私は

渺たる身心を虚しくして  
何を諸友のために爲すことが能きたか、  
私は死と飢ゑに隣して

つねにつねに  
病弱な身心を鞭つて来た、  
それなのに私の爲たことは  
天上を仰いで自ら唾するよりも愚かな行爲は  
つねに自ら蒔き自ら收穫つたところの苦い種子に過ぎなかつた、  
そして云はうやうやない汚辱であつた。

24

25

私のすべての友よ、  
私は私みづからを謙虚なる捧けものとして  
諸友のまへに置いたつもりであつた、  
そして私みづからの在ることが  
諸友の鼓舞と靈感の源であると自ら驕りもした、  
私が諸友に贈り得たものは  
世の誰れもが與へうる以上を出でなかつたことを  
いまこそ耻ぢて身も心もみづからして裂く想ひがする。

病んで力ない瞳は  
太陽の光に打たれることをこのうへなく恐れる、  
魂はふり濺ぐ太陽の光と熱のなかに浴して  
かぎりなく喜んでゐるのに  
この肉體の窓は何故かう恐怖を感じるのか。

——病中作——

この道をかうして光は世界から来る

眞暗な道だ、

草木の吐く氣が飽くまで吸へる眞暗な道だ、

——自分はいま一心になつてその道を

都會の海蛸子の足の疣が

やがて吸ひつかうとしてゐる郊外の

野のむかふの

林にかこまれた掘立小屋のやうな家、

そこでは自分のために飾氣もない一基の堅い寢臺と

鈍いけれどもやがては世界を照らすだらう燭の火が

自分によつて點ぜられるのを待つてゐる、

自分は結婚の夜を待つ若い人々が抱くだらうやうな

怡しさと湧きたつ想ひとを胸に秘めて

急ぐ、一心に

その眞暗な道を。

26

突如！

巨大な魔物の双眼からの

27

爛々たる光のやうな自働車の

警燈が、うしろからさつと流れて来て

浮んだもののやうに描き出されたのは

自分より一二間さを

とほとほと歩いてゐる老郵便脚夫だ………

今晚は！

へい今晚は！

お苦勞です、ありますか？！

一束の郵便物を自分に手渡して

この忠實な老人は

また眞暗ななかに黙々として吸ひ込まれて行つてしまつた。

自分は家に着くが否や

扉を蹴破るやうにして室に入つて、

先刻、街で買つて来た蠟燭の包装を裂き棄てて

その悉くに火をつけた………

私の心は幸福で一ぱいになつた、

私はふるへながら讀む………

老いた異國の偉大な同志からの私の病氣が愈つたかとの見舞と

心をこめた讀ものの贈物、

これらのはあの血煙の漲り掩うてゐる大亂の渦中を

横切つて來たのだ、

私を戦争の生む凡ゆるる壯烈な行爲と凡ゆるる悲惨な物語の幻想のなかに陥らせながら……。

つねに春の邦で、

血のやうな虞美人草の花が咲き盛る邦、  
廣漠とした自由の邦、

カリフォルニアの若い農夫からのそれには

戸外の労働の幸福を力説してある。

私はまた描く、

インクも凍るといふ極寒の新殖民地の

海につづく大江に面して絶壁のうへに建てられた洋館

その客室の火爐のまへに

愛兒をあやして居られる極めて母らしくなられた若い夫人を、

ああ、

さらにさらに敬愛する人々からの

鼓舞と激励と愛とに満ちたいくつかの消息！

戸外にこの夜は

木の梢を過ぎる風すらもなく

水の底のやうな静さである、

この道をかうして光は世界から来る、

私を愛し、護り、鞭つ光が来る。

### 林間の祈禱

『地のはてまで闘争をやめしめたまへ！』

仰げば紺青の空、

時は春、

そこには何の虚偽の影が無い

あるものはただ温い光だけ

生きものの腫にはうつつて来ない光と熱の泉だけである。

此處は、

人間の世界に遠くはないけれども

ただ平和だけが呼吸してゐる

林間の草場である、

———とある灌木のかけから

いつはりならぬ祈禱が一人の若ものによつて捧げられる。

祈禱の言葉は簡單である、

私は如何なる義しい理由の下にあつても

闘争を欲しないものである！

馬鈴薯と國際法

春の日の午後の港、

——その港のうへをやはらかくつつんで育むやうな春の光、  
紫に烟る港の景色、

私はいま、そこに投錨してゐる

歐洲航路のK——丸の船橋に

呆然と立ちつくして

あなたを、

あなたが臺所の流しのまへで

馬鈴薯の皮をむいて居られた姿を

そのまま、まざまざと描き出してゐる。

健康で、

良い娘さんで、そして小さい妹には親切な姉さんであるあなた、

その姿を私は描いてゐるのだ、

ママは、もうそろそろ

耕地の世話で忙しがつてゐらつしやることでせうね。

30

31

その馬鈴薯は牛酪で炒めて呉れませんか

——何時の間にか、私はあなたの傍に立つてゐる——

あなたは何故わらふんです、

さうして上げるから、あつちへ行つておとなしく本を讀んでゐらつしやいと云ふのですか、

男は臺所へ出て來るもんぢや無いといふんですね——

(笑止な追放者は

母家から

花畑や果樹園のなかの徑を

あかるい夏の光を浴びて

追はれてゆく……………)

この船には新しく

二門の砲が搭載されたのです、

そしてそれは全航路の四分の三がすでに危険區域になつてゐるので、

敵の潜航艇の襲撃に備へるためなのです、

商船が武装をする?!

何だか海賊が公海を跋扈してゐた大昔のやうな話ですが

これがたつた今、私の眼のまへにつきつけられた光景です、

早い話が、

花見るひとの長刀——つて云つた格です、ね、

酔つぱらひが丸太をもつて雛壇をかきまはすやうな工合です、

而かもこの時、全世界の大學の講堂では



頭に霜を頂いた教授たちが  
国際法といふ名だけは嚴めしい可笑しなものを  
あんまり空々しいぢやありませんか、眞赤になつて講義してゐるんです。

右の足と左の足とが

勝手な方向へ、

一つは東へ、も一つは西へ行かうといふんです、

右の手と左の手とが、

お互に捧切れを握つて撲り合ふんです、

首と胴とが愛憎づかしをやるんです、

民衆の無智をいいことにして

その親しい故郷から

最愛の父母や、妻子や兄弟姉妹、愛人の間から引っこぬいて

無理やりに鐵砲をかつがして

戰場といふ恐しい底無穴へ追ひこくるのです。

君、君、

君は—たい誰れが憎くてさうのべつにボンボン鐵砲を放してゐるんです？

と、たづねたらびつくりして聲を出して泣き出さない兵士が

一人でもあるだらうか。

噫、  
春光のあまねく濺ぐ

午後の港、

そこに船がかりしてゐる武装商船の船橋に立つて

私はあなたの平和な家に想ひをはしらせながら

暗然とする、

人間の世界の共同の平和はかくまで脅威されてゐるのだ！

地を踏む感謝

——阿部龍夫氏の母上におくる詩

耻ぢる、

耻ぢる、

この小さい沃野に立つて、私は云はうやうない耻ぢちを覚える、

ママ！

あなたの額の汗と、全身の膏とを營養の糧として

どうだ、勇ましく豊かな匂ひを漲らしてゐる果樹園の果樹！

くわツとした太陽のもとに威勢よくなびいてゐる耕地の青い青い耕作物！

このめざましい光景を前にして

私は衷心から耻ぢる、

私の少年時代と青年時代の大半を擧げて

苦み、悩み、悶え抜いて來た靈魂と肉體の闘争、

私の顔に一ぱいの曇りをかぶせて

時々しくせしめることからつねに妨げるところの

苦闘そのものが、

地を離れての空しい想ひの戦ひが

そもそも何を『今日』の私に齎したか？

34

耻ぢる、

耻ぢる、

想ひの翼はあまりにも蒼穹に向つて翔けることに強ひられ過ぎた、

所詮は地に、

地から生へ抜き生へ抜いて茂る大樹の梢に

巢食はねばならぬのを忘れてゐた、

何といふ愚かな想ひの鳥だつたらう？！

その空しい努力から疲れてまつさかしまに落ちたもの

それは私で無くて誰れか。

ママ！

利を逐ふことに忙しい人々に見棄てられてゐたこの處女地が

—— 瘦せて、一樹の灌木の微すら生ひ立つことをしなかつた砂地——

あなたが受取るを餘儀なくせしめられた罵言と嘲笑！

第一の播種が爲された日に

あなたの頬に潮した自ら信するところ厚かつたこの誇らしい血のいろ！

それらをいま、私は夢みるもののやうに心にまざまざと描く。

耻ぢる、

耻ぢる、

耻ぢる、

私は旅びととしてここに幾週目かを過して

35

あなたの歴史の忠實な讀者として身みづからを幸せられてゐる。  
そして限りない耻ちに身を責められる、  
浮薄な空理と  
根のない推論とででつち上げる曲學阿世の歴史家の筆は  
或ひはあなたの優れた事業のうへにまで及ぶまい  
而かもそれが何だ？

私はけふ、  
たつたいま！

私の歩みを素足で、先づ

私に最も近い地のうへから初めなければならぬのを感じる、

私はあまりに宙空の凝視者であつた。

さあ、

素足で地を踏んだこの歡喜！この幸福！

喜んで下さい

ママ、そして私のあらゆる友たち！

噫、

酷烈な暑熱ののちの靜かな匂やかな夕

私はこの小さいけれど豊饒な沃野に立つて

耻ぢる、

耻ぢる、

36

37

そしてその後に来たこの歡喜のために  
ママ、

あなたを限りなく讚美し、感歎する。

詩の目覺め

嵐だ、

嵐だ、

嵐の暴れ狂つてゐる真唯なかに  
人間の子のむすめが  
力をこめて弾くピアノ。

『音響の波濤』は

嵐に逆らつて勇ましく闘ふ、

指揮するものは人間の子の而かもむすめだ、

狂へ、嵐！

撓むな『音響の波濤』！

やがて嵐が収まつたときには、

洗はれたやうな新月がすでに空に懸かつてゐた、

そのとき初めて『強さ』のなかの詩が目覺めた。

一九一六年篇

墳墓を有せざるものは蒼穹を以つてその  
死屍を覆はる。

嵐のまへ

仰ぐ空は暗雲に閉され  
心をなごます微風もなく  
野の青草はそよがふともしない。

嵐のまへだ、  
嵐のまへだ、  
あまりに静かである。

いづこからか人語が  
壺のなかからの咒文のやうに聞こえ……………  
(そのかたちはもとより見えない。)

群れにはぐれた鳥が一羽  
眼路をひらめき過ぎる、  
——ただそれだけ。動く何ものも無い。

嵐を待つ心だ、

40

41  
凝乎として  
呼吸をひきしめる。

封じこめられた

雷霆が地軸で呻吟いて……………

何時この地の表へ出やうといふのだ？

嵐だ、

嵐だ

そしてそれを待つてゐる自分！

漂泊者の歌

行け！

行け！

汝は行かなければならない、  
止まることをゆるされない漂泊者だ。

黙つて行け、

汝の伴侶は雲だ

風だ

嵐だ——それらは汝みづからだ。

——哀日本の旅にて——

42

草の葉

43

草の葉よ、

卿の生きんとする強き力をおもふ、

自分はいま涙ぐんで

卿に對する。

誰れか卿をかよわいものといふぞ、

見よ、卿のその生きやうとする強き力を

何ものに比べても劣ることのない

そのちから！

健康を喪失つたものに

卿がもつ力は

耐へ難く痛みを覚えさせる。

生きなければならぬ

どんなことがあつても、

自分には生きやうとすることそれだけのために

凡ゆるものを喪失つてもいいのだ

そしてさう思ふことが力であり生命である。

温い言葉に飢ゑてゐる群れ

『どうぞ、ゆつくりお匂ひ下さい!』

……………私どもは、どんなにこの言葉に打たれたことだつたらう?!

僅かのこれらの言葉に、

花屋の奥さん……………

私どもはこんなにまで温い言葉に飢ゑてゐるんです。

秋ももう可なり闌けた頃の雨あがりのあとの夜だつた、

私ども蒼の放浪児は、

いつものやうに飽かず語り合ひながら見知らぬ街のとある花屋の舗頭にさしかかつたのだつた、

街路樹の三角楓は呪符のやうに枝のさきにわづか散り残り、

篠懸は、群れを離れた魚のわびしさで、枝頭に風もないのにはためいてゐる……………

そのとき!

誘はれるともなく紅紫とりどりの色彩のなかの純白の花からの妙な匂ひに

足をとどめさせられた、

そしてお互に相顧みた……………。

『いい匂ひだなあ!』

『うむ!』

私どもの間に短い沈黙の時がかすめるやうにあつた……………。

『どうぞ、ゆつくりお匂ひ下さい!』

氣がつかかなかつた私どものうしろに

乳兒を守りしてゐるひとの聲だ、

驚きましたよ、奥さん!

そして私どもはどんなに感激したでせう、

奥さん、

可笑しいですか?

私どもは涙をながさないばかりに感激したんです!

花屋の奥さん、

あなたの偶然の僅かのそれらの言葉は

私どもに『幸福』の世界をかへして下さつたんです、

おわかりになりますか?!

是非わかつて下さい、そして受けて下さい

私どもの感激から溢れ出る感謝の言葉を!

ああ

私どものその夜の眠りの幸福だつたことよ!

私どもがこんなにまで温い言葉に飢ゑてゐると誰れが知らう?!

これは同時に君らの衷心からの言葉である

僕は『自分の家』といふものを持つて居らないが、  
そして夜ねるときはたつた一枚の毛布より以上を持つて居らないが、  
君はつねに僕によつて歓迎される、  
君はいくら貧乏であつてもいい、  
それは人間で無いといふことの反證にはならない、  
君が貧乏であればあるほど、  
君が微力であればあるほど、  
僕は君の友達であることを誇りとする。

僕の地図はたつた一色に塗られてある、  
そして『時』だらうが、  
『距離』だらうが、  
そんなことは一切おかまひなしの  
奇蹟のやうに自由で、幸福だ。

46

天氣が曇つてゐたつてそれが何んだ、  
太陽はきつと何處かにかくされてあるのだ、

47

胸を張つて、  
瞳をあけて、  
威勢よく歩きたまへ。

闇夜なら闇夜でいい、  
我武者らに歩いてゐれば  
やがて朝だ  
僕はそれを考へるだけで血が躍る、

僕はこんなに君を好いてゐる。  
僕の貧しいが然し暖い朝飯の半分は  
つねに君のために供へられてある、  
君は外国人ぢや無い、  
僕の地図は一色に塗られてある。



『風に吹かれて東京の街を』

『あなたは今日も、  
風に吹かれて東京の街を  
歩いていらつしやるでせう……』

噫、

野の少女、あなたは天使だ、  
あなたは純な心それみづからだ、  
僕はあなたのことを想うと胸が一ぱいになる。  
あなたの云はれる通り、  
僕はけふもけふとて雨の終日<sup>いちじち</sup>を、  
そら、いつだつたか夏の夕がた  
真赤な太陽が地平線のむかふに沈まうとするとき、  
野の、あなたの家のまへの捨石に腰かけてゐた  
宿無しのやうに、

48

あの頼りない腫の持主のやうに、  
僕の探しまはつてゐるものとは何の關係もないやうな、  
素ッ氣ない建物の林立する大都會の『八幡の籤』を、迷宮を、

49

雨は降つてゐてもカ、シャ、カ、シャ、と乾き切つた人の心の沙漠のなかを  
『風に吹かれて……』とまよつてゐた。

噫、

野の少女、あなたの  
『日本一の詩人、悲觀してゐる碎花ちゃん』は、  
けふもけふとて痛む胸をかかへて  
何を一たい探し歩いてゐたのだらう？  
あなたは純な心の所有者だもの、  
そしてこの世界はあなたにとつて、  
『幸福』と『歡喜』の泉だらうもの……。

だが世の中には、

いまあなたの『野の家』をつつんでゐる北國の冬のやうな取りつく島もない無慈悲さに  
年が年中、苦しめられ、泣かされてゐるあなたの澤山の友達があるのを想はなくてはいけない。  
あなたのママが備へて下さる暖い臥床<sup>ふしど</sup>のうへで、  
あなたが就寝の祈禱と感謝を捧げるときに、  
眠らうにも臥床を有たない多くの友達があるのを忘れてはならない。  
寒ざらしのビウ、ビウ鳴る風の音は  
その氣の毒な友達の訴へる聲では無いだらうか、  
あなたの耳にも聽えるだらうあの悲しい響が。  
(それをあらゆる幸福な人々の耳は聽かうともしない！)

あなたの

ママや姉さんたちとの楽しい晩餐の團樂のとき

貧しい人が戸を叩いたならば

(それは風のやうに、何處から来たかわからないだらうけれど、)

あなたの優しい姉さんはきつと走り出て、

親切な言葉と、

あなたたちのために丹青してこしらへた暖い晩餐の半分を、

躊躇なく預け與へるだらう、

そしてあなたも亦よろこんでそれに倣ふことを僕は疑はない。

噫、

心さやしい天使のやうな少女、

僕の一番好きなお友達、

僕は冬の北國の『野の家』に

いま!

これらの面を反けなければならぬやうな言葉の多くを送る。

そして泣く、

あなたの純な瞳にも、

やがてうつされないのであり得ない

虐殺と横暴とが眞晝間平氣で行はれてゐる赤裸々の世界の有様を。

50

51

何故あなたはこのお友達は、

こんなに蒼い顔ばかりして、

いつもいつも考へ込んでばかりゐるのだらう?

いまにわかる、

いまにわかる。

では、さようなら、

おやすみなさい。

如何だ、あの風の音は?

雨の音は?

(僕は今夜とても平氣で眠ることはできない。)

傷心

晩秋の  
港の公園の夕がた、  
噴水はけむりの如く散り  
見るものの心は痛む。

雨のあとを  
うすらつめたく  
一日照つてゐたので  
ここの港の街なかの小公園の  
植物や、石ころや、路や  
みんな生乾きの白けた色をしてゐる。

青かるべきものの  
倦んだやうな、疲れたやうな  
いかにも堪らない樹や草の色だ。

52  
ただの石ころだつて

53  
もう少し親しみはあらうといふものなのに  
どれもこれもてんでんばらばらに轉つてゐる。  
路は路で  
往き來の人々の履物を  
素ッ氣なく蹴上げてゐるやうに思へる。

しかもそのうへに  
たまらないでは無いか、  
あの太陽の色を見たまへ、  
それよりもそれをてりかへしてゐる窓々のガラスを、  
いや一層堪らないのは  
その建物の角張つた屋根だ。  
疲れた足を引すつて  
いましもベンチに座つて  
ほつと溜息をついた自分に……………  
それらの景色が一ぺんに  
押寄せて來た。  
自分は眩暈がして  
辛うじてぶつ倒れるのを耐へた。

人がみんな幸福に見える日

降りつづく秋の雨に

自分の心はぬれ鼠のやうになつて  
わびしく街を歩いてゐる。

自分の心の隈々をさがしても

この瞬間には

暖さが無い、光が無い。

幸福が待つてゐるやうな気がする……………

馬鹿云つちやいけない……………

自分の心を、ひどく脅して走り去つた自動車。

往來を

歩いてゐる人たち、

一たいかうも多勢何の用があるのだらう？

どれもこれも

54

55

雨にもめけないで

そして幸福さうだ……………。

それなのに自分はどうだ、

たよりなく雨の街を毎日毎日

ほつつき歩いて。

何を探してゐる？

何を求めてる？

知らない、知らない。歩かなければならないやうな気持ちに追ひ立てられるからだ。

それだけ！

人はみんな幸福さうだ、

然し自分はそれを羨んではゐない。

秋雨の街をさまよひながら

髪を梳る雨、

頬をやはらかくたくたく雨、

たましひを蝕ます雨、

——その秋雨のなかを  
どこへ向つて自分は行くのだ？

もとより知らう筈もない、

ちまたの漂泊兒ではないか、

涙は頬をつめたく雨とまじつてつたはる……

足にまかせて（それすら何處へと知る筈があらう）

風のまにまに吹かれてゆく

たましひは追はれたふるさとへの

まだ見ぬふるさとへの

郷愁にうちふるへながら。

56

また、

ぬれしよほたれたフラダイン篠懸の行路樹のわびしく立つ

57

十字街へ出た——

人はみな忙しげに歩いてゆく

自分だけはいつまでも残されて立ちつくしたままである。

ああ、秋雨——

べつとりと病犬の毛の皮膚につくやうに

薄い衣物は心地悪しく自分の肌にまきつき

胸は痛む——

遠い郊外の家の自分の机を想はない、

熱い珈琲を想はない

友達の暖い言葉を想はない、

——凡ゆる親しいものから逃れて

而かもどこへか行かなければならぬやうに急ぎ立てるものがある心に

秋雨の街をさまよひ歩く自分。

有樂部川畔にて

遠山には雲湧き——  
海の方からの潮霧は次第に濃い。

夏なのに

夕かぜはつめたく袂を吹き  
海に向つて急ぐ有樂部の流れは  
やむときなくその寒い瀬の音をたてる……………。

折しも川上から

矢のやうに下つて来る

一つの獨木舟、

それを繰るものは夢の人か、現の神か。

橋上に佇んでゐる私を

ふと見上げたその眸差、

追はれ滅びゆく民族の  
憐憫を乞ふやうなその眸差よ。

58

59

老アイヌは

黙々として

夕川を下る、

みづから造つた獨木舟に

自身と、明日の糧となるべき薪をのせて。

野の家にて(Ⅰ)

風は吹く——激しく野を、  
自分はめざめてその音を聴く、  
自分の心がいま深い暗黒の底から  
世界の心に通ふのを感じる。

60

野の家にて(Ⅱ)

暗黒ではあるが——  
潜んでる光をどこからかあつめて  
花は白くおほめいてる。

静かではあるが——  
満ち溢れる『幸福』のゆゑに  
をとめは耐へがたくおもはれる。

花は夜でも光る。  
静かであつても力はおのづから溢れて  
遠い梢を過ぎる風と相通ふ。

61

## 寂しい目標

寂しい目標は  
けふもけふとて孤獨に燃えてゐる。

生物、  
無生物、

——あらゆるものが共通の愛に溶け合はうとして闘争をつづけてゐる。

夢ともなく

うつつともなく

影像のやうに喊聲が自分を前方に向つてせきたてる。

寂しい目標は

けふもけふとて孤獨に燃えてゐる。

62

63

## かたちの獵人

かたちに對つての祈禱ではない、  
祈禱がかたちを生む

無から有が生ずるのだ。

夢みる人々よ、

かたちを探ねるな、

卿たちの寂寥と悲哀をつかむに終るのを恐れる。

戀を戀する友よ、

卿たちの歡喜は、

靈と肉の燃えて溶けて、かたちならぬ渾沌のうちにある。

かたちを追求するものには

つねに『失望』がその溢面を見せる、

かたちの獵人の笑止なその焦燥よ！



自主

自分はすべての人の名に於いて  
このみづからを愛する。  
茫漠として大氣の如く  
とらへ難いみづからといふものを。

時として

自分は黙つて

このみづからの活動をながめる——。  
とらへ難い大氣の兄弟のみづからはつねに自由である。

戦場のやうな

都會の大騷擾のなかにあつて

みづからは炷く

縷のやうな香を、生命の壺から。

64

また、

暴風雨の原頭に

65

夜をこめて怯ます、めけず抗ひ通した

草のいたいけな葉片からみづからが微笑して歡喜の太陽に對つて新しい日の灌奠をする。

戸外の焦燥をよそに

海の底のやうな動搖を絶した

夜の室に閉ぢて、梢にさわぐ風に耳聳てて

みづからが重くみづからを凝視する。

生命あつて

どんなところにも呼吸してゐる

みづからよ、

そのかたちは無く、つねに自由である。

トラヒスト修院詩集

一九一六年夏—秋

信じたる者の群は、おなじ心おなじ思となり、誰一人その  
所有を己が物と謂はず、凡ての物を共にせり。

—使徒行傳四・三二

風の日の聖鐘

鐘の音が飛ぶ

疾風の使者のやうに

野の面を。

海は晴れやかさをかき消されて

墨汁の色に暮れまどつてゐる、

草場の草、

林の樹々は、

そそくさとし、或ひはざわめき立つて

心の安けさを忘れたやう、

遠く丘のうへの聖寺の鐘の音は

或ひは急に或ひは緩く

『御告の祈禱』を運んでは来るが

平和を失つた風の日の自然は

耳を開かうとしない、

彼處——聖寺のなかには

いつものとほりの祈禱と勤行があるだらうけれども、

そしてあのたつた孤つひびの赤い聖燈みあかりが

68

ゆらぎもせずに黙つて

修士たちと、

聖堂のなかの影のやうなもののかたちを

まもつてゐるだらうけれど……

ここ野の面には風の焦燥と

平和を失つた光景があるばかりだ。

この旅びとは泣いてそれらを眺め或ひは想つてゐる。

69

痛悔

野に

山に

黙々として働ける修士をあつむる修院の鐘、  
初秋の太陽は落ちんとして  
あかあかとしばし雲燃ゆ。  
われは爲すことなくして  
この日をも暮しつ。

70

草場の修士

71

窓の外の

一列の白楊ゴザラの防風林、

そのむかふのはてしない草場を

風に吹かれて翻へりゆく白いかたち

神か、魔か――

夢のやうな現のやうな生きもの。

音のない眞晝、

強い日光に刺されて

すべてのものは喘いでゐる。

折から蒸された草場の映布にうつる

白い羊毛の衣を纏ひつけた修士

(否) 精霊のかたちが風に翻へる。

アヴェ・マリアの鐘

聖堂せいどうのなかの

ものとしてその影の幻ならぬなし……………

信乏しきものの心を脅して

影のかたちの動く、

吊られたる聖燈みぶしの

赤きただ孤ひとりつの小さき光

その生なまむ諸もろのかたちの影……………幻。

莊嚴な寂寥と平和とがここを領じてゐる、

そして生けるものは『神』だけ、

動く黒い影は、踞る幻は——生きものではない

そこには『神』だけが在ある。

おお、勤行が滞りなく進んでゆき

やがて讃頌と聖樂が響き……………

アヴェ・マリアの鐘鳴る。

すすしき鐘の音は

72

73

野を越え、澤を涉り

山に反響し、

海の方へながれて

遠く消える——

その響のするに

静かな祈禱が搖曳する。

虫の音

聖堂のなかの  
ともしびはただ孤つなれど  
赤き光、いよいよ明く——心を貫く。

跪き

或ひは起ち

人か、非ず——ただ幻にして。

夜半の祈禱の

一向なるほどに

繁き虫の音。

一九一五年篇

卿等相互に稱讃し合へよ。

——エミール・ヴェラエラン

匿されたる太陽

吾れはつねに想像す——  
彼方に匿されたる太陽を。

吾が行くみちの荆棘と、  
砂礫と、  
疾風と、  
迅雷と、

——それらの渾沌のはてに。

76

自らの聲に驚く

77

危し、危し、

吾が感性は時として鈍からんとす、  
燃ゆる鎔岩のなかに溺れながら、  
心肉をのがれがたき世界苦に嚙まれながら。

## 月下の柩

月光はつめたく、  
地上のものを焦したり。

ここは郊外の原なり。  
隈もなき明るみのなかを  
そぐはざる鈍き光に提灯を點じて  
かすかに人語を醸しながら  
一團のものそこはかとなく動ききたりて、ものかけより出づ……………。

やがてそは夜を火葬場にゆく  
人々の小さき群れなるを知りたり。  
なかにかこみたる  
長方形の白布もて掩ひたる小さき柩、  
そのなかには魂なきかたちの眠るなるべし。

78

行列を飾る華の一輪だにあるなく  
儀容またなし。

79

さびしく死にゆけるものの幸福を  
涙ぐみつつよるこびもこそすれ  
いたましき想ひのあらざるこそあやしけれ。

やがて白き柩と、そをまもりゆく人々と、  
それらの醸す人語と、  
ただ一つのものとなりて、  
鈍き提灯の光のみほつちりと  
あとはむなしさにまぎれ終りて。

大都會の郊外の

夜ふかし。ただ月光のみいつまでも死を知らざるべし。



落日

落日は、いま  
あらゆるもののうへに悲しい色のヴェールをかける。

眼路のかぎりの  
野、丘、

島、杜、小川、橋、さては遠い山なみ、  
しばらく熱のない火焰のなかに。

偉大なるものがいま眠りに就かうとする、  
そして自然はつめたい情熱に身みづから  
瞬時の榮光に恍惚としてゐる。

この時だ、  
農夫が新しい日の歡喜の太陽をふと忘れやうとするのは。

80

81  
虚しき境

目離れぬ群星の天蓋、  
その各自は生物の一つ一つ、  
われに囁くは何？

大いなる都會の明るみと音響に背きて急ぐほどに、  
暗き野のみに……  
満ちひろがるおのが蹠音。

星の一つ一つと、  
わが呼吸と脈搏の一つ一つと、  
さらにこほしゆく蹠音の一つ一つと……(暗きなかに)

いつしか、  
それらただ一つのものとなりて。  
畏怖か、  
非ず！  
身と心と虚し。

秋

あらゆる鋭角はいよいよ鋭く  
あらゆる輪廓はいよいよ明確に  
——いま、夕なれど。

心の痛み涙に溶けて  
烟の如し  
ゆくへもわかず、散る。

吹く微風の  
ひそみ足、  
何をかささやく。

天地のすがた、  
これよりぞ露あちはならむとし  
虫の音しけし。

やがてそことなき白き空のかぎり

82

83

月ながれて  
かたちわかず。光のみ。  
高原の一角にたちて  
身は魚のごとし  
秋氣のなか。

心の曇

悲哀を盛るうつは  
透明ならずして  
想ひ痛し  
この日。

84

85

驚異

苦痛に曝せ  
渺たる肉靈、  
空想兒は自ら鞭てども  
なを甘き夢をいたはる。

絶叫に疲れて  
眠りをおもふころ  
黄昏降り來て  
新月の光淡く身にさしそふ。  
いまわが心全く碎かれて  
世の驚異多きに呆然たり。

太陽空に高くあれど

86  
太陽は中天高く懸けて  
みづからをあれど、  
地平は閉されたり、雲低く。  
生々の氣は囁目の草木に漲りわたれども  
おのれは顛垂れて今日もゆく。  
われは凡ゆるものを無にかへしたれど  
見えざる鎖は——  
影のごとく長く曳きつづく。  
今日、花苑に匂ひ高き花も  
莖はきのふの根につながりて、  
噫、  
新しきものの如何ぞありえむ  
歎き深けれども是非なし。  
おもへ、吾が何處より來たり  
何處へ去りゆくかを。  
風は地上の塵埃を吹き捲きて  
中天の太陽に爛熟の色を塗沫したり。

87

晦暝の天地はやがて  
吾が蠱惑の心の姿なるべし。  
幻想は翼あるものの如く  
翔りて極みを知らず。  
自由なりよ、幻想、  
せめて幻想の行手を沮むなかれ、  
世に悲しく呪はしきものは  
限定なり、牢獄なり。  
噫、萬象のうへにありうべからざること  
を豫覺せしむる  
未審日の太陽のもと、  
あはれにも匂ひ高き華——  
幻想はうち薫す。

導體

柔き地を蹴もて掘りゆくうちに  
心なやましくなりぬ。

永遠の歎き

地の皮膚を梳る河——  
愛するものの髪を梳る良き愛人の如く、  
萬物の母たる地に  
父としての河流、  
豊饒なる秋は卿に順したがひて實る。

心なき雲、空に亂れて  
卿がこころのために曇る。  
心せよ雲、  
地をめくりて歎くものあるを。

祈禱は徒なり。  
けふも、けふとて  
——空に亂るる雲。

烟

ただよへる大氣に  
まじりて炷たかるる

——香、

さだかに見えねば  
もとより捉へかねて、  
かたちならぬかたち……………。

わが在るは  
かくこそあれ。

90

91

生まるる邦

潛々たる雨

(——黄金の微塵蓮華)

東方の邦の春まさに閑け

櫻の花の散り亂れ、

白き鳩、光の粉の如くうちまじりて糺ふ……………。

暁なり。

## 地の子目次

## 一九二八年篇

幕屋のうへの雲(六)  
五月、苦惱の日(九)  
夕雲の歌(一二)

## 一九一七年篇

かへりつつある幸福(一六)  
子供は教導者だ(一九)  
嵐のなかに躍るもの(二〇)  
朝の歌(二三)  
暗い白日(二四)  
この道をかうして光は世界から来る(二六)  
林間の祈禱(二九)  
馬鈴薯と國際法(三〇)  
地を踏む感謝(三四)  
詩の目覺め(三八)

一九一六年篇

- 嵐のまへ(四〇)  
漂泊者の歌(四二)  
草の葉(四三)  
温い言葉に飢ゑてゐる群れ(四四)  
これは同時に君らの衷心からの言葉である(四六)  
『風に吹かれて東京の街を』(四八)  
傷心(五二)  
人がみんな幸福に見える日(五四)  
秋雨の街をさまよひながら(五六)  
有樂部川畔にて(五八)  
野の家にて I(六〇)  
野の家にて II(六一)  
寂しい目標(六二)  
かたちの獵人(六三)  
自主(六四)

トラビスト修院詩集

94

- 風の日<sup>の</sup>聖鐘(六八)  
痛悔(七〇)

95

- 草場の修士(七一)  
アヴェ・マリアの鐘(七二)  
虫の音(七四)

一九一五年篇

- 匿されたる太陽(七六)  
自らの聲に驚く(七七)  
月下の柩(七八)  
落日(八〇)  
虚しき境(八一)  
秋(八二)  
心の曇(八四)  
驚異(八五)  
太陽空に高くあれど(八六)  
導體(八八)  
永遠の歎き(八九)  
烟(九〇)  
生まるる邦(九一)



同じ著者によりて

『末日頌』詩集

『地の子』詩集

『民主主義の方へ』譯詩集

エドワアド・カアヘンタア原著

『草の葉』譯詩集 近刊

ウォールト・ホキツトマン原著

『文明、其原因及救済』論文集 近刊

エドワアド・カアヘンタア原著

表現社版 定價 壹圓五拾錢

大正八年三月九日印刷・大正八年三月十五日發行

著者發行者 東京府豊多摩郡代々木上原二二四〇

印刷者 東京市京橋區入船町一ノ二 (英文社)

發賣 東京市京橋區桶町十五番地 (振替東京三三六八番)

株式會社 富田 碎花  
新井 修平  
大鏡 關

7